

## コミュニケーションについて

上野直蔵

ご卒業をお祝い申します。顧みて充実した大学生活でありましたでしょうか。最近、大学生の間に三無主義というのが拡がっているというのを耳にしました。無関心、無感動、無気力の三無だということです。社会との間の深い裂け目をのぞき見て、すっかり自己中心の殻に閉じこもり、周囲の人々とのつながりに関心を抱かず、むしろそれを拒絶しようとする傾向があるのだそうです。ものの豊さだけを、便利さだけを、効率だけを追ってきた社会のゆがみが青少年に、自分と社会とのつながりを肯定的に捉えることを妨げ、孤立感と疎外感を深める大きな原因となったのでしょうか。学問の世界、スポーツの世界、余暇の世界、こういう世界で、そうした自閉症的な生活をお過しではなかったでしょうね、ということをお伺いしたかったです。

そういうことで気がつきますのは、大学生のコトバがだめになった、ということであり

ます。人は決して自分独りで生きてはいけません。他人とのつながりを大切にし、社会の中で自分が何であるかを見定めていかなければならない。そういう社会での自己証明のために、コトバは大切なメディアであるわけです。たとえば、もともと卑近な例をとれば、挨拶、であります。挨拶は人間関係確立の導入部分にあるコトバなのです。挨拶、というのは人と人が自己を証しし、自己を語り、心と心を開きあう大切な人間営為のひとつであります。もちろん、そういうものがお経のように形式的に唱えられるものになってしまいますと、欺瞞性というものが出てまいりまして軽侮の対象となってもおかしくありません。コトバというものは、いつにてもそのように形式的になりがちなのです。だからこそコトバを大切にして工夫する。そういう意味で、おしきせの挨拶が欺瞞的であると思うなら、いかに真情をこめるか、という工夫が挨拶にも必要でありましょう。でも、若い人は挨拶をバカにして育ったのではないかとさえ思います。コトバの工夫どころか、「オハヨウゴザイマス」「ドウモアリガトウゴザイマス」さえ、はし折る。感覚的な、そしてずるく省略したコトバでまかなう。「ドーモ、ドーモ」という意味不明な挨拶がまかり通っていますが、単なる符牒のような、効率的だが、折り目のない挨拶です。便利、効率、功利を追って育ってきた今の若者。陸（むつ）みあうべき友人は受験競争で、一人でも多くひきずりおろすべき競争相手でありました。そのために十分に家庭で過保護をうけて非効率な親の手によって一切排除されてきました。そういう体験が基本にあって、一見儀礼的な挨拶を非効率とみるのでしょうか。挨拶抜きで、というのも確かに効率的ですが、実はもつと大いなる効率、人間関係を犠牲にした効率性なのです。

それに、コトバに対する不信心というものが、若い人々に抜きがたいものとしてあるよ

うに思うのです。それは妥協を知らない理想主義的傾向をおしなべてもっている若者の潔癖感からでたものでありましょう。それは、コトバがコトバを裏切るということを間断なく見せつけられてきたからであります。たとえば、結婚式などでのそらぞらしいコトバの華、花婿は必ず優秀な成績で大学を卒業したことになり、新婦は例外なく才媛であつたりするコトバの虚像性。若者はそれを中年者のように巧まざるユーモアだ、とは苦笑してうけとめられないでしょう。こういう私的な人間生活におけるコトバのうらぎりはまだしも苦笑ですませるものでありましようが、事が一国の経綸にかかわってくる時には苦笑ですませなくなります。知っていることも知っていると云わないし、覚えているに相違ないのに「一切記憶にありません」と言いうる精神の不毛が公生活にのさばっているということ。コトバというのは率直に自己を表明するために使用さるべきものだという人間関係のメディアとしての、疑問の余地のない前提が崩れてしまふ。できない公約をペラペラとコトバでまくしたてる政治家。そういう美辞麗句には実体が伴わない時には、おかしいのだ、いや、おかしいではすまない、容易ならざるマガゴトであるのだ、という認識が必要であります。

諸君、諸君の大半はこれから、いやおうなしに企業もしくはそれに準ずる世界の中で私の生活を余儀なくされます。そしてそこには企業用のコトバがあるでしょう。取引用のコトバがあるでしょう。上司、先輩とのコトバの応酬があるでしょう。そして好ましい異性に愛のコトバを語る機会もあるでしょう。コトバが、しばしばコトバの実体をうらぎる、そういう生活の実感を深くされることもあるでしょう。そういうコトバにはいつもさめていてください。そして、そういうコトバをおかしい、と思う時には、当然のこと、新しい、



おかしくないコトバ、単に実用的でない、効率一辺倒ではない、優しいコトバ、率直なコトバを工夫する責任を痛感していただきたいものです。

イエスはその公生涯において実に多くのコトバを語られました。でもイエスがもともと嫌われたのは、シラけたコトバ、即ち、学者のコトバ、政治家のコトバ、偽善者のコトバでありました。パリサイ人のコトバの論理性は、まことの意味の説得性がない、ということとを十分にご存知でありました。百万言費した彼等の整然としたコトバ、罪の女を弾劾するコトバ、それも、イエスのしばしの沈黙と「あなたがたのうちで、本当に罪のない人だけがこの女に石を投げなさい」という簡潔なコトバに及ばなかったのです。「コトバ、コトバ、コトバ」こう叫んだハムレットも、いつわりだらけのコトバの世界にうんざりしたのです。いつわりのないコトバを求めましょう。神のコトバのいつわりなさを範として自分のコトバを工夫しましょう。「はじめにコトバあり」とは『ヨハネによる福音書』の冒頭のコトバであります。そしてそれは同志社百余年に流れるコトバの認識であります。

新卒業生を社会に送るにあたり、いつわりのないコトバを世に投げかけよ、と薦めて祝辞といたします。

(同志社総長・理事長)

# 自立の道

松山義則

時代の変動は大きく、国内的にも国際的にも将来の予測や見通しのたてづらい状況となりました。このような時期に独立して社会に旅立たれる卒業生諸君はよろこびとともにきびしい決意を心にひめられていることと思います。

当然のことながら、人間は自立し、自分の責任を果さねばなりません。この流動きわまらない時代に、また野望と闘争、そして相互不信のうずまく人の世へ、心清廉にして無垢なる若々しい諸君が自らを失うことなく、また倒れることなく歩み出されることはまことに容易ではありません。

人間は生来、他人をたより、他人からの援助を求める欲望をもっています。人間の弱い甘えの原型でありましょうか。しかし、このような人間が自主、自立を願い、そう生きようと努力する姿こそ、まことにけなげにして勇ましい人間の生きざまであります。われわ

れはひよわな幼児のときでさえ、満身の力をこめて自らの足で地上に立とうとして倒れ、倒れてはまた立ち、ふんばってきました。母親はこれを凝視し見守ってはくれましたが、立って歩くこと自体は自分の意志と努力とでありました。

競争社会と差別社会のなかにあって、自立して歩むことは困難ですが、艱難は忍耐を生じ、忍耐は鍊達を生じ、鍊達は希望を生じると聖書は教えています。まさに困難難苦に直面して、自立して打開の努力をかさね、耐えて歩むときに、その人のなかに活力が生され、鍊達の士となるであります。苦難に耐えるところに人間としての成長があります。そして鍊達の人のなかにこそ、実現の可能性をもった希望が生み出されるのであります。

新島襄先生は函館を脱出し一年余りの間、水夫となって労役に服し、ボストン港に入りました。彼は目的の外国に到着したというよろこびとともに、これからの先きゆきに大きな不安を味わったと思います。「言葉の通じない無一文の亡命客」としてボストン港にひとりなげ出された彼の心は全くの孤独でありました。当時のアメリカは南北戦争の直後であり物価は暴騰し、このような亡命客をうけ入れるような状況ではありませんでした。彼がボストンの街を歩いてはじめて買った古本は「ロビンソクルーソー」であります。英語のまだまだ不足の彼が辞書もなく毎夜熱心に読みつづけましたが、そのときのことを先生はつぎのように書き記しています。

「ロビンソン・クルーソーは、最初に、祈ることを私に教えてくれた。難破したかのロビンソン・クルーソーは苦難のなかで神に祈った。私も毎晩、寝床にはいると、どうか私をみじめな状態にしないで下さい。どうか私の大きな志を上げさせて下さい。といって神



に祈った。」

無人島のなかのロビンソン・クルーソーはさびしさにたえきれず神をさがし求め、「主よ、私を助けて下さい。はげしい苦しみにさいなまれている私を助けてください」と熱烈な祈りをささげました。新島先生もこのロビンソン・クルーソーに共感し、祈ることをおぼえたのであります。われわれも雑沓する人々のなかにあつてしみじみ孤独を味わいます。艱難にたえ、孤独にまけぬ人間になりたいと思います。聖書はまたつぎのように教えています。「神はあなたがたを耐えられないような試練に会わすことはない。試練と同時に、それに耐えられるよう、のがれる道もそなえて下さるのである。」

これからの諸君の生涯は戦いであります。歩む道はまことにけわしいことであります。人間として天地に恥じない目標をかかげて歩むときに諸君は天来の守護をうけるのであります。われわれにとって大切なことは、理想をもとめて、正直に生き、そして努力をかさねることです。そのときには、かならず「みえざる御手」が諸君ひとりひとりを守り、苦しみに負けぬ道をあたえ、諸君を導くと信じます。

希望に生きて苦難にたえて歩むときに、諸君の心を知り協力する人が生まれるであります。新島先生はボストン港のかたすみに倒れるが如く悄然としていたときに、新島の志を感じ、これを達成させようとする人物、ハーディ氏があらわれたのであります。孤独のなかに、祈り希望をかかげて自立して歩むときにならずよき隣人が諸君をささえるであります。

卒業生諸君のご健康とご多幸を祈ります。

(同志社大学長)

# 好奇心の活用を

岡 野 久 二

今春、同志社学園を卒業されるみなさんに対して衷心より祝意を捧げます。

みなさんは大学院あるいは学部課程を終えて、これから実社会へ出てゆかれるのですが、その実社会は好むと好まざるとにかかわらず厳しい生存競争の渦巻く世界であります。それは強者が弱者を征服し、力あるものが支配者となる適者生存の社会といえます。物質文明が極度に発達し、人間生活が規格化され、画一化されてきている現代においては、かかる生存競争の枠の外で生きることがますます困難なことになりつつあります。みなさんは同志社が自信をもって世に送り出す卒業生ですが、こうした社会風潮の中にあつては、大学で学んだことがいかに役に立たないかを痛感されることでしょう。しかし、そこで失望、挫折してはいけません。確かに大学で学んだ学問は実生活においては、すぐに役立たない場合があるかもしれませんが、力と物質がすべてを支配する世界では、学問の真理はあ



る意味では弱い面もっています。また、大学は職業的な専門知識や技術を教える場ではありませんので、実社会に出て即座に役立つ実用的な知識をみなさんに与えてはいないのがあります。しかし、大学では、学部学科によって違いはありますが、それぞれの専門分野における真理探求の基本は教育しています。みなさんは物事の真理を研究、解明してゆく方法は一応身につけておられるはずで、すなわち、色々な問題に対して多角的にアプローチしてゆく学問的な人間形成を、今日までしてこられたのであります。いわば、入学された時には荒地であつたものが、耕され、施肥され、豊かで、肥沃な土地に仕上げられているのです。この土地にどんな種を蒔き、どんな作物を作り、どんな実を結ばせるか、みなさんのこれからの社会生活における重要な課題であります。折角、今日まで培ってきた豊饒な土地を不毛な荒野にすることはできません。聖書には、「すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。良い木が悪い実をならせることはないし、悪い木が良い実をならせることはできない。」(マタイ・七・十七—十八)とあります。みなさんの身につけられた豊かな土壌は種を蒔けば良い木を育て、良い実を結ぶことができる可能性を十分に秘めています。だから、力の世界の実利主義に目をうばわれることなく、着実に、しかも前向きに、蒔いた種を育てて行つて下さい。それが空に聳える大樹となるか、人の目をひく大輪の美しい花となるかは今後のみなさんの努力次第です。

校祖新島襄先生は、同志社英学校第一回の卒業式の送別の辞を次の有名な言葉で結ばれています。“Go, go, go in peace! Be strong! The Mysterious Hand will guide you.”(行け、行け、心安らかに行け! 強くあれ! 不思議なる御手はあなたがたを導き給うであらう。)これは学び舎から実社会に出てゆけば、波乱があり、困難、誘惑に遭遇し、

悲しみや悩みを経験することもあるが、常に心安らかに、強い精神をもって進んでゆけば、神の見えざる手が必ずみなさんを導いて下さるのであるうとの意であります。絶えず前向きに生きてゆくことが人間の成長にも結びつくのでありますが、そのためには常に人生に対して積極的な態度を示すべきでありましょう。この積極的な態度は好奇心という言葉で云いかえることもできると思います。好奇心は不可解なものに対する興味から起る、もっともプリミティブで基本的な人間の情感であり、十八世紀のイギリスの文豪、サムエル・ジョンソンは、「好奇心 (curiosity) は活発な知性の永続する確かな特徴の一つである。」と述べています。もちろん、好奇心のおもむくままに行動すればよいというわけではなく、活発な知性の働きである好奇心には、すぐれた道徳的、倫理的基盤によった正しい方向づけが大切です。新島先生が祖国の将来を思い、勉強への熱情止みがたく、元治元年幕府の禁を犯して渡米されたのも、正しく方向づけられた好奇心の発動であつたと云えましょう。

同志社での学業を終えられ、日本の各地へ、世界の各国へ散ってゆかれるみなさんが同志社で培われたキリスト教主義の徳育を生かされ、あくことなき好奇心を発揮して、常に前向きに新しい日本、新しい世界の創造のために活躍されることを心からお祈りします。

(同志社女子大学長)